

創立三七〇周年にあたって——回顧と現在——

龍谷大学
文学部長

赤 松 徹 真

本学は一六三九（寛永十六）年に本願寺第十三代良如宗主のもとで学寮として開設された。徳川政権は、「公儀秩序」を確立するため武家諸法度、諸宗寺院法度などを定め本格的な制度、政策を展開し、仏教各宗においても宗学の構築、僧侶養成が課題となっていた。本学が開設された年に徳川政権は鎖国令を発したが、学寮での真宗・仏教の研究・学びは、「鎖国」下にあっても開かれた人文知の回路を有する僧侶を育成するものであった。遠くイギリスでは一六二八年に権利の請願がだされ、一六四二年から四九年にわたり清教徒革命がおこり、近代化への胎動を告げていた。

その後、日本は十九世紀半ばに開国を告げ、明治政府は、岩倉具視らの遣欧使節団を派遣したが、本願寺も梅上澤融、島地黙雷らを派遣し、留学生として赤松連城らを送りだした。一八七五（明治八）年にヨーロッパから帰国した赤松連城らによつて本学では、学校制度が採用され、文明開化に対応する従来の宗学のほかに幅広い教科を学ぶ普通学科を設け、新たな教育展開をはかった。一八七九（明治十二）年には大教校を建て、一八八四（明治十七）年には普通教校を開き、大学林を広く開かれた教育施設、幅広い教養を修得する教育へと改革が進展した。一九〇五（明治三十八）年には専門学校令による仏教大学となり、一九二二（大正十一）年には旧制の大学令の認可

を得て龍谷大学と改称された。

本論集は、大学林の同窓会『会報』第一号、一八九九（明治三十二）年にさかのぼる。その後、三年して『六條学報』となり、さらに校名の更改にもなつて『龍谷大学論叢』、一九三三（昭和八）年には『龍谷学報』と改名された。一九四四（昭和十九）年には一時休刊したが、新制の文学部が発足した一九四九（昭和二十四）年に現在の『龍谷大学論集』として復刊された。

戦後、本学では経済社会の転換期にあたり社会科学系学部として一九六一（昭和三十六）年に深草の地に経済学部を開設した。それは、親鸞聖人七〇〇回大遠忌法要の記念事業であり、総合大学への第一歩を踏み出すものであった。続いて経営学部、法学部を設置した。その後、一九八九（平成元）年には創立三五〇周年記念事業として滋賀・瀬田学舎に理工学部と社会学部を開設し、さらに一九九六（平成八）年には国際文化学部を開設するに至った。国際水準の科学技術の進展や国際化に貢献しうる教育・研究を目ざしながらも、建学の精神に基づく複雑な人間のありようへの深い凝視、理解を有した人間教育の課題に応えようとするものであった。

ところで、ポストモダン論が語られはじめてすでに約半世紀が経過する。それは近代の諸分野の行きづまり、構造主義の議論にととまらず近代的な知性、人間論の基本に関わる深い問題でもある。文学部の諸分野が長きにわたって集積してきた建学の精神を内在した人文知の教育・研究、そして短期大学部が集積してきた社会福祉分野の知の教育・研究は、今後、いつそう現代社会に発信し、対話力を高めることに努める必要がある。そのことによつて、集積してきた文学部・短期大学部の開かれた人文知の伝統力も発揮できよう。

本年、三七〇周年を迎えたことを機縁に、文学部・短期大学部の長きにわたる発展に、人文知の集積に寄与していただいた諸先生の恩徳に感謝しつつ、私たちは、文学部・短期大学部における人文知の継承と創造に向けて努力してまいりたいと思う次第である。